

寺職の随筆

第3回

水くさいこというなよ

私の本山修行時代の話です。私は学生時代、十一年間ほど剣道に勤しんでいました。が、その中で腰を壊してしまっており、いざ本山での修行生活に入るとその過酷な修行の中で腰を更に悪くしてしまいました。坐禅や正座が長時間でなくなるという禅宗の修行生活では致命的な肉体状況の中、最初の百日間は禁足といい、一切の外出や外部との連絡がとれない状況でありました。その禁足があけたのち病院に入院し、神経ブロック注射等いろいろな処置を施しましたが改善せず、結局メスを入れることとなり、リハビリ含め三ヶ月間本山を離れました。その後なんとか復帰し、修行生活を送ることとなりましたが、その禁足中のことです。

修行生活の中では体が悪いゆえに仲間たちに迷惑をかけることもしばしば。何よりも仲間と同じ行動や修行ができないつらさというのは、あの隔離された空間の中で助け合いながら励まし合いながら過ごす中では修行以上に修行をしている心持ちでした。その中でも仲間には迷惑をかけたくないとある重い物を運ぶ仕事をしている中、ある二人の修行僧が手伝ってくれました。

「二人でできるよ」という私に向かって彼は「水くさいこというなよ」という一言を発しました。彼は同日安居(どうじつあんく)に本山に上がった修行僧のことでしたが、この一言は私に強烈な印象を与えました。

考えてみれば今の世の中、いろいろな意味、いろいろなところで、「迷惑をかけたくない」という言葉が聞かれます。図々しくなるのもいかなものかとは思いますが、関係性によつては「水くさいな」ということも多々あるのではないのでしょうか。そして水くさいと言つて他者のためにちよつとしたことでも手を差し伸べることがそれぞれに少しでも増えればもつと過ごしやすい世の中、環境になるのではないかなと感じます。人間、究極的にはやはり助け合いが必要だと感じますが、普段の日常・生き方がいざというときに現れてきます。葬儀の現場はまさにそうで、死者の生前の生き様がそのまま参列者の雰囲気にも現れます。

話が少しそれましたが、私自身水くさいこというなよつて感じて利他行を意識してみたい今日の頃です。

お墓を境内墓地に建立されている方々へお願い

お墓はその所有者・利用者の自己責任による自己管理が基本かと存じます。お墓そのものの管理はもちろんのこと、お花や供物の処分、お墓とお墓周辺の掃除等、各自の責任と気持ちをもって出来る限りのご協力をお願いいたします。お墓を守る人がいなくなるとなれば墓じまいという選択肢もでてくるかもしれません。そのような方々は龍源寺の合同納骨墓・集霊墓への合祀という選択肢もございます。お悩みの方はお寺へご相談ください。

編集発行

深見山

龍源寺

〒949-8311 新潟県中魚沼郡津南町中深見乙1118番地

☎(025)765-3055

http://www.shinkenzan.com

Instagramアカウント @shinkenzan1582

龍源寺報

78号

曹洞宗郡市青年僧侶の会主催

「ブツダに出逢う」開催

平成三十年十一月二十四日、十日町市クロステンにおいて曹洞宗郡市青年僧侶の会主催「ブツダに出逢う」という行持が開催されました。青年僧侶の会会長、田村宏道老師の発願のもと、仏教の始まりとなったお釈迦様の一代記をわかりやすく在家の皆様にも伝えていきたい、ということ、特別法要とお釈迦様関連の宝物展、酒井大岳老師の講演会という内容でございました。お釈迦様の誕生日である降誕会、お悟りを開かれた成道会、亡くなられた涅槃会を一つの舞台の中で展開した特別法要は文字通り特別な法要となりました。法要の中の美しいイラストと映像は、この龍源寺報のデザインも担当してくれている龍源寺副住職の同級生・滝沢萌子氏に依頼し作成していただきました。参加者からは大変な好評をいただき、青年僧侶の会としても大変にあり



がたいお仕事をしていたいただきました。宝物展は郡市内曹洞宗寺院からお釈迦様に関する品物はたくさん集まり、これもまた信仰と芸術の合わさった見事な展示会となりました。そして酒井大岳老師には何回もこの郡市内にはおいでいただいておりますが、この度も大変楽しくそしてわかりやすいお釈迦様の教えを示してくださいました。大行持でございましたが、またとない貴重な機会と体験になったかと思えます。ご参加いただいた皆様、ありがとうございます。

← 摩耶夫人(お釈迦様の母)



平成30年秋～平成31年春の龍源寺

七五三の皆様



志賀家の皆様

大本山總持寺雲水来寺



托鉢



だんごまき



村山家の皆様



哲龍座元、大本山總持寺送行

平成三十一年四月二十二日、およそ三年間の修行生活を終え、龍源寺住職の四男・哲龍座元が大本山總持寺を送行いたしました。送行とは修行道場から出ることをいい、本山での席がなくなることです。多くの厳しい経験をしたようで、たくましくなつて帰つてまいりました。哲龍座元は五月より東京都内の檀信徒が大変多いお寺の手伝いをしております。これからも龍源寺の諸行持には随喜をしてもらうので檀信徒皆様と顔をあわす機会も多々あるかと思ひます。今後ともよろしくお願い致します。



好事も無きには如かず

自分にとって悪いことが起きて欲しくない、これは誰でも思うことではないかと思ひますが、いいことも起きないほうがよい、というのがこの「好事も無きには如かず」という言葉の意味です。これはどういったことなのでしょう。

私たち禅宗では、とらわれということから距離を置きます。どんなことであつてもそこに固執し囚われれば苦しみになっていくからです。例えばいいかどうかはわかりませんが、ものすごいお金持ちがいたとしましょう。欲しいものはなんでも手に入るし、場合によっては人の心を金で買つてい、ひきつけているような生き方もしています。とにかく自分の思い通りになるような生活をしていたとします。しかしそれはお金という裏付けがあるからです。でありますからお金がなくなることは非常に困るわけで常に大金がなければ自分の思い通りにいきません。そうすると常にそのことが心配事として頭から離れません。何か経営

でもして成功していれば次世代に対する不安を死ぬまでもつかもありません。これは果たして幸せといえるのでしょうか。とてもそのようには思ひません。

そこで禅宗では自分にとって好ましいことであつても、心がそこに囚われ続くら無いほうがよほどいいのです。それは好ましく無いことでも同様です。どんなことでも囚われれば苦しみであるのです。お金や物だけではなく、権力にもいえることでしょう。時節がきたらパツと離してしまつたほうがいいのです。次世代に任せられる人材がない、まだまだ自身が出張らなければならぬ状況であればしょうがないかもしれませんが、その立場に心地よさがあるゆえに手放せないのであればやはり囚われであるわけで、それを守るためにおかしな行動もとりますわけです。例えば難しいのですが、世間一般に欲されることを例示してみます。人によつてはもちろんカネ・モノ・権力があるのは良いことという価値観ではないと思ひます。そういつたものは煩わしいものという価値観もひろがつている実感もあります。

思い当たる檀信徒もいるのではないでしょう。か。よくよく参究していただきたい言葉です。

